

「館山まるごと博物館」のエコミュージアム実践研究

地域資源の再発見と街づくり

太古の地層から房総里見氏の城跡、戦争遺跡、青木繁の名画誕生の家など、安房地域に残る文化遺産を保存・活用するNPO法人安房文化遺産フォーラムのエコミュージアム活動は30年近い。知られざる魅力を発掘する「館山まるごと博物館」の挑戦をレポートしよう。

青木繁「海の幸」 ゆかりの漁村のまちづくり

太平洋を臨む館山市布良（めら）の高台に、直線的なアーチ型モニュメントが佇む。夭逝した天才画家・青木繁の没後50年を記念し、当時の館山市長が全国の画家に呼びかけて資金を集め、建立したものである。

1904年、青木繁は友人や恋人とともに布良を訪れ、重要文化財となる『海の幸』を制作した。襖一枚ほどの横長のキャンバスに、大きなサメを何匹も下げた漁師たちの活気ある姿が描かれている。危険なマグロ漁は水難事故が絶えず、青木が滞在した小谷家の当主喜録は帝国水難救済会の看守長でもあった。

布良と相浜という2つの漁村集落からなる富崎地区は、館山市のなかでも少子高齢化が深刻である。富崎小学校の統廃合問題に危機感を覚えた人々は、漁村の誇りを後世に語り継ぎたいと考え、文化遺産の保全とまちづくり活動に取り組んでいたNPO法人安房文化遺産フォーラム（以下、NPOフォーラム）に力を貸してほしいと依頼した。

2005年、NPOフォーラムは富崎地区コミュニティ委員会と「青木繁『海の幸』100年」から布良・相浜を



青木繁「海の幸」記念館の敷地内にはブロンズレリーフ「刻画・海の幸」が設置されている（写真右）。これは館山市在住の彫刻家、船田正廣氏による塑像をブロンズ鋳造したもので、青木繁の絵画と船田氏の塑像に感銘を受けた韓国光州市立美術館名誉館長の河正雄氏が寄贈した。同じ作品は久留米の青木繁旧居や韓国光州市立美術館など5カ所に設置されている。なお、入館料は維持協力金として大人200円。土日のみの開館であるが、年会費2000円の友の会制度を設けて、多くの支援者を募っている

見つめる集い」を共催した。青木繁研究者の講演、小学生による舟歌『安房節』の演奏とふるさと学習の発表、地元住民らによるシンポジウム。100人を超える参加者は、改めて青木繁の評価や地域の歴史文化を再発見した。

パネリストとして登壇した小谷家当主の小谷栄氏は、「古い家だから壊そうと思っていたが、地域活性化に役立つなら、当時のままの家を残したい」と語った。この発言が契機となって、小谷家住宅の保存活動が始まっていく。

まちづくり仕掛け人のひとり、NPOフォーラムの事務局長、池田恵美子さんは事業構想大学院大学エコミュージアム研究会の研究者としても活動している。

「学校も産業もなくなり疲弊していく地域では、諦めムードがあります。けれど、自分の暮らすまちの歴史文化

を知ることは、誇りを取り戻し、希望が湧いてきます。私も子どもの頃、教科書で見ていたこの絵が館山で描かれたことは大人になってから知り、驚きました。こうした積み重ねが“市民が主役のまちづくり”への原動力となっていきました」（池田さん）

ウォーキングガイドや講演会、埋もれた歴史文化の掘りおこし、郷土料理教室など様々な活動を行いながら、小谷家住宅保存の可能性について各方面と話し合いを重ね、館山市や教育委員会も巻き込みながら活動の輪が広がっていった。

全国の画家と協働して 歴史建物を後世に残す

2008年、NPOフォーラムが事務局を担い、青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会（以下、保存会）

が発足した。小谷家住宅は館山市有形文化財に指定されたが、市の条例では維持修理費は所有者負担である。そこで、青木繁を敬愛する画家のネットワークが立ち上がった。女子美術大学名誉理事長であり、後にノーベル生理学・医学賞を受賞される大村智先生が理事長となり、NPO法人青木繁「海の幸」会（以下、「海の幸」会）が設立された。

両者と自治体が連携を図って、一般的な募金活動を行うだけでなく、館山市ふるさと納税として小谷家住宅修復事業への寄付を指定できる制度を設けたり、チャリティ目的の青木繁「海の幸」オマージュ展を全国巡回するなど、広く支援を募った。10年の活動が結実し、4,300万円の修復基金を創出して、築130年の小谷家住宅が蘇った。

NPOフォーラムではこの間、国交省や文化庁などの補助金や委託業務を受けて、多様な取り組みを進めてきた。なかでも修復工事に伴い、住民参加のワークショップ形式で造園や手すりの設置、屋内の造作・展示設営などを行ったという。

まちづくり活動は、隣接した布良崎神社にも波及している。『海の幸』の構図は祭礼の神輿がヒントになったと自負し、境内の環境整備や解説看板設置、ガイド活動を氏子たちが率先して行っている。

2016年4月、青木繁「海の家」記念館・小谷家住宅のオープニングセレモニーには、大村先生をはじめとする「海の幸」会の画家や保存会の会員のほか、市長・県議・観光協会役員、市民らが500人集まった。布良崎神社の神輿と相浜神社の囃子も歓迎の賑わいを添えた。

記念館の館長には、代替わりした小



NPO法人安房文化遺産フォーラム代表・愛沢伸雄氏(左)、事務局長・池田恵美子氏

谷家当主の小谷福哲氏が就任した。

「会社員を定年となり館山に戻ってきたら、この活動が始まっていました。多くの皆さんの想いを受けて、老朽化した我が家が記念館として蘇ったことは、光栄であると同時に責任も感じています。末永く後世に残せるよう、地域の人びとと力を合わせて努力したい」(小谷氏)

館内には、『海の幸』など青木作品の複製画のほか、友人にあてた絵手紙などが飾られている。小谷家の納戸からは明治期の資料も見つかり、パリ万博に出品された『日本重要水産動植物図』の原画や、朝鮮王族の書画なども展示された。来館者に自ら解説する小谷館長は「先祖を顕彰したり、多くの方と交流したり、まちづくり活動は楽しい生きがい。忙しくも充実した日々です」と語る。

福原有信を語り継ぐ 椿の森プロジェクト

富崎地区にほど近い松岡八幡神社には、1911年に資生堂創業者の福原有信が奉納した鳥居がある。農村部の松岡という小さな集落でも、地元有志らがNPOフォーラムに協力を要請し、まちづくり活動が始まった。2014年には福原有信を語り継ぐ会が発足し、ふるさとの偉人を学ぶ講座やウォーキングなどの活動を行っている。



青木繁「海の幸」記念館館長・小谷福哲氏(左)、小谷由喜枝氏

翌年、福原家の分家にあたる福原勇さんの提案により、新たな取り組みが始まった。神社裏手の金比羅山が放置され、山林が荒廃していたため、傾斜地の雑木林を伐採して、椿の苗木を植林するプロジェクトである。椿は館山市の木であり、資生堂のロゴマークも花椿である。市内には世界的な椿研究者の残した椿園もあるため、苗木を分けてもらったという。

取材の日はちょうど祭礼であり、NPOフォーラムの愛沢伸雄代表や池田さんとともに直会の食事に同席させていただいた。神社や祭礼がコミュニティの絆を育んできた場であることを実感するひとときであった。

語り継ぐ会の副会長・早川政義氏は、「愛沢さんたちが地域の歴史や福原のことを調べたり、企画を手伝ってくれたりするおかげです。布良の人たちとも活動を連携しています」と語った。金比羅神社の鳥居は松岡と布良の人が連名で奉納している。金比羅山は海の守り神なので、漁民にとっても大事だったのであろう。

福原は資生堂の次に帝国生命保険会社を興し尽力している。「その背景は故郷の隣村で海難事故が絶えなかったため、その救済事業が急務だったからといえるでしょう」と愛沢氏は指摘する。

NPOフォーラムの活動は、地域に

眠る歴史資源を掘りおこすだけでなく、地域に暮らす人々の絆を強固にし、他の集落同士が刺激し合ってまちづくり活動を進める扇の要となっている。

平和への願いに共感できる 子どもを育てたい

東京湾口部の館山は、帝都防衛のための東京湾要塞の拠点であり、1930年に館山湾を埋め立てて館山海軍航空隊が開かれた軍都である。本土決戦が想定された戦争末期には特攻基地が作られ、敗戦直後には本土で唯一、米占領軍の直接軍政が敷かれた地である

1989年、高校の世界史教諭だった愛沢氏は教材づくりのために、戦争遺跡の調査研究を始めた。標高約60mの山中に2km近く掘られている赤山地下壕跡は館山を代表する戦争遺跡であり、この保存・活用を広く訴えたことから、「館山まるごと博物館」のエコミュージアム活動が生まれた。

地域を歩いて、人に会って話を聞き出し、パズルのピースのごとく歴史の断片を集めなければ見えてこない真実がある。戦時下の房総では花作り禁止令が出され、花の種苗の焼却が命じられた時、命がけで守った農民がいる。愛沢氏は「歴史を学ぶうえで、中央からだけでなく、地域の視点が重要です。地域に生きた人びとの姿を想像する力こそ、社会を創造する力になると

考えています」と語る。

戦争遺跡も文化財として認められるようになったのは、原爆ドームの世界遺産登録に向けた1995年の文化財保護法改正であり、これがエコミュージアム推進の追い風になった。1997年には戦争遺跡保存全国ネットワークも組織され、愛沢氏も連携を図ってきた。

館山市は2002年に戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究を行ない、翌年に発行した報告書では「オープンエアミュージアム・館山歴史公園都市」と名付けたエコミュージアム構想を目標像として宣言している。これにより赤山地下壕跡は整備され、2004年に一般公開が始まり、翌年には館山市指定史跡となった。

知るほどに面白い！ 学ぶ喜びを共有したい

1996年、『南総里見八犬伝』のモデルになった戦国大名・里見氏の稲村城跡が、市道建設計画で破壊寸前となった。愛沢氏らは戦争遺跡と平行して城跡の保存を求め、17年にわたる市民運動の末、南房総市の岡本城跡とともに国史跡となった。この活動により、里見氏の歴史が再評価され、ゆかりの鳥取県倉吉市や群馬県高崎市との市民交流も盛んになっている。

江戸期に建立された平和祈念のハンゲル「四面石塔」をめぐり、日韓の学



松岡区の福原有信を語り継ぐ会のメンバー。前列は左から館山市長の金丸謙一氏、福原勇氏、千葉県議会議員の三沢智氏。地域活性には行政との連携が欠かせない

術調査やまちづくり交流も行ってきた。青木繁の生まれ故郷・福岡県久留米市との交流も育んでいる。

エコミュージアムとは「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」だと定義されている。「館山まるごと博物館」では、この枠を越えた連携の広がりが生まれている。

実際に館山を訪ねると、「まるごと」という表現が実にしっくりくる。自然環境も戦争遺跡も芸術作品も全部ひっくるめて文化遺産であり、それらは錦織物のようにストーリーが相互に絡み合っていて、とても面白い。

たとえば、赤山地下壕の壁面には500万年前の地層や断層、同心円状の縞模様などが観察でき、地質学的にも興味深い。房総沖には2つのプレートが沈み込む日本海溝があり、館山は日本で一番隆起しているという。階段状の海岸段丘や、内陸部で縄文時代のサンゴ地層なども見ることができる。

かつて離れ小島だった沖ノ島は、館山海軍航空隊の埋め立て地との間に砂州がたまり、歩いて渡れる無人島となって環境学習の人気スポットである。原生する自然林や館山湾のサンゴは北



館山市指定史跡である館山海軍航空隊赤山地下壕跡。凝灰岩質砂岩などからできた岩山のなかに、総延長2km近い地下壕と巨大な燃料タンク基地跡などが残っている(撮影:東洋平)

限域といわれる。夜の館山湾で輝くウミホテルは、戦時下の中学生が採取と供出を軍に命じられていたという実話もある。

NPOフォーラムでは豊富な地域資源を組み合わせ、小学生から大人まで多様なニーズに応えたスタディツアーガイドを提供している。近年では、企業研修やまちづくり視察などが増えているという。

地域ストーリーを踏まえた 持続可能な地域社会づくり

文化財保存運動は平坦な道のりではなかった。自治体と対峙した時期もあった。ピースツーリズムという平和産業の雇用創出を目ざしてNPOを設立し、愛沢氏は定年より8年早く教職を退いた。国内外から注目されていたが、東日本大震災により来訪団体が激減し、打撃を受けた。戦後70年には戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会を開催し、再びメディアに取り上げられ、赤山地下壕の来訪者は年間3万人を超えた。今では館山市観光協会の理事となり、その活動に感謝状が贈られるようになった。

これまでは、事業収入の大半を文化財保存やまちづくり活動の経費に費やし、人件費の創出は困難な状態にあったという。ようやく青木繁「海の幸」記念館の開館を迎えた今、磨きがかけられた地域資源はそれぞれ成熟し、ようやく「館山まるごと博物館」はセカンドステージに向けた準備が整いつつあるようだ。

「雇用につながる事業を構想する時、骨子がぶれてはいけません。歴史を踏まえた地域特性に基づく地域ストーリーこそ、重要な骨子になると考えられます。魅力的な地域ストーリーを地

域住民が共有することで、持続可能な地域社会づくりに向かうことができるのではないのでしょうか」と愛沢氏は語る。

かつてマグロやアワビ漁で賑わった館山は、日本を代表する漁村であった。奈良時代にはアワビを朝廷に献上していた歴史もある。明治期、房総のアワビ漁師らは渡米して移民となり、韓国済州島からは海女が出稼ぎに来ている。近代水産業発展の中核を担い、水難事故があれば国境を問わず助け合う。戦争や震災を乗り越え、平和・交流・共生を培い、海とともに生きた人びとの姿こそ、安房の地域ストーリーにふさわしい。

「館山まるごと博物館」は、この理念に基づき、持続可能なまちづくりを目ざしている。具体的には、ダイバーと漁師の連携によるアワビ牧場を構想している。30年にわたり、アワビの気持ちになって、アワビの研究してきたプロダイバーの成田均氏は、従来の

アワビ養殖とは異なる方式で生態系を蘇らせるプロジェクトを提唱している。

今風にいえば、アワビの婚活、アワビのコロニー作りである。アワビが自由に生きられる海洋環境を再生し、地域経済の活性化を同時に実現するというプランである。そのためには、“森は海の恋人”といわれるように、海に水をそそぐ森林の保全活動も同時に進めなければならない。松岡区の椿の森プロジェクトと連動し、布良の安房自然村の広大な山林を整備することも事業構想のひとつである。

「『海の幸』誕生のふるさとに来たら、美味しい『海の幸（食文化）』を食べていって期待しますよね。豊饒の海を取り戻して、どこにも負けない安房のアワビで活気ある漁村を再生したいねって、夢みるオトナたちがロマンを語り合っています」と池田さんは笑う。

11

取材協力
NPO法人安房文化遺産フォーラム

エコミュージアムを活用した事業構想 ～地域資源の再発見と観光まちづくりプロジェクト研究～(第2期) 研究員募集

日本のどんな地域にも、他にはない独自の資源が必ずあります。歴史的な街並み、山林や海浜空間、川、動物などの自然遺産、風俗、伝統などです。空き家や廃校でさえ、アイデアひとつで資源になります。エコミュージアムは、それらの地域資源を発掘し磨き上げ、事業化まで進化させることで、地域の発展に活かす取り組みです。本研究会では、研究員各自の「地方創生につながるエコミュージアム事業」のモデルの構築を目指します。

<概要>

- プロジェクト開始時期:2016年7月末から(追加募集中)
 - 研究員募集メド:2016年9月16日(金)
 - 定員:最大15名
 - 担当教員・ファシリテーター:福留強 氏・NPO法人全国生涯学習まちづくり協会・理事長
 - 研究会:月2回・平日の火曜日(1回4時間程度)
 - 開催場所:事業構想大学院大学(東京・表参道駅徒歩1分)
 - プロジェクト参加費用:年間120万円(消費税別)
- ※お問合せ:事業構想大学院大学 事業構想研究所
jken@mpd.ac.jpまたは、03-3478-8401(エコミュージアム・プロジェクト研究会担当:
吉田までご連絡ください。

[編集後記]

月刊事業構想は、創刊以来、5年目を迎えることができました。ひとえに読者の皆様、取材や執筆・寄稿にご協力いただいた皆様、広告主の皆様はじめ、関係者の皆様の大きなお力添えがあったからこそと思います。改めて、お一人お一人に感謝の気持ちを述べたいと思いますが、まずは、この編集後記の場を借りて御礼申し上げます。

今号は、空き資源活用をテーマに、大特集を組みました。空き家が全国的に大きな社会問題となる一方で、それらを利用した新たなビジネスを発想する人もいます。空き家でなくても、ある時間帯は、使われていない空きスペースや機能は、数多くあります。その中でも、最もビジネス的に成功しているのは、ライドシェア（相乗り）や民泊といったシェアリングビジネスでしょう。誰も使っておらず、もったいない、誰かに使ってもらえないか？、というふとした疑問から始まりましたが、ITと融合することで、マッチングに要するコストをミニマムにし、利便性や信頼性を高めることで、飛躍的に成長してきたと言えます。まだまだ空き資源は、身の回りに溢れており、考え次第で大きな事業機会を得られるのではないかと感じました。

地域未来構想、プロジェクトニッポン特集は、前号までに、47都道府県すべてを取り上げて来ましたが、今号は、総集編を組みました。今までの取材活動を振り返るとともに、新たな傾向が見えてきたと思われましたので、是非、お読みいただければ幸いです。（編集部）



【表紙】

サイバーエージェント 代表取締役社長 藤田 晋

今号の表紙から、目を瞑って構想を考える人物を掲載します。

真剣に未来を考えると、人は、どのような表情をしているのでしょうか。

次号予告

2016年11月号 (10/1発売)

大特集

大学スポーツの潜在力

特集2

地場産業・グローバル化

新シリーズ プロジェクトニッポン 地域未来構想

酒を生かした地域づくり

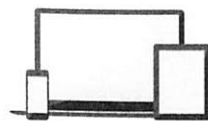
購読は、スタンダード会員（雑誌・オンライン併読とサロンスピーチ参加特典付き）がおすすめです。



国内最大級の
事業構想データベース

月刊「事業構想オンライン」

<http://www.projectdesign.jp/>



● 編集部公式アカウント

www.facebook.com/pdpreview

[@twitter.com/pdesign_jp](https://twitter.com/pdesign_jp)

月刊 事業構想

PROJECT DESIGN

10月号

2016年9月1日発行

通巻第49号

発行人
東 英弥

編集人
福山健一

編集室長
田中里沙

編集長
織田竜輔

副編集長
伊藤貴志・江口 象

DTP
エルグ

写真
杉能信介 / 東京フォト工芸
トライアウト

本社
〒107-8418
東京都港区南青山3-13-18
TEL 03-3478-8402
WEB projectdesign.jp
facebook.com/pdpreview

発行
学校法人日本教育研究団
事業構想大学院大学出版部

発売
株式会社日本ビジネス出版

事業構想大学院大学 職員募集のお知らせ
下記の職種で募集しております。

- ・事業戦略、クリエイティブ分野 准教授
- ・事業構想研究所 主任研究員
- ・出版部 編集、企画営業
- ・大学院事務局員

詳しくは、<http://www.mpd.ac.jp/recruitment/>

本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

■本誌記事内容に関する問い合わせ・ご意見は

月刊「事業構想」編集部

TEL 03-3478-8402

■広告掲載のお申込み、お問い合わせは

月刊「事業構想」広告事業部

TEL 03-3478-8402

特別企画

67 **小学校英語教育の変革**

68 英語教育改革で何が変わるのか

70 大阪府
英語で夢を語る「なにわっ子」育成

72 mpi松香フォニックス
小学校英語教育の最前線

発想・アイデア

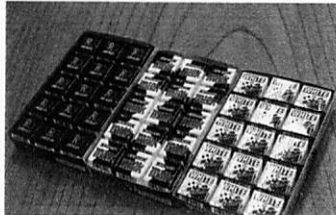
130 地域×デザイン
まちを編なおすプロジェクト
「趣味」をフックに
人の輪を編む
鈴木紗栄 日本デザイン振興会

136 クリエイティブのまち青山
右脳で感知する「遊び場」
平野暁臣 岡本太郎記念館館長

分析・論説

60 ゲーム会社対決!
任天堂 vs テンセント

120 海外進出 成功への道
「1個20円」の強み、海外でも
松尾裕二 チロルチョコ取締役副社長



124 健康ビジネスに商機あり
薬の宅配、薬剤師の活用で実現
喜納信也
ミナカラ代表取締役薬剤師・経営責任者

126 未来をつくる新規事業の起こし方
脱チームの強みが
活きる仕組みづくり
西村勇哉 ミラツク代表理事

128 観光ビジネス参入
都心と地方を「アイデア」で繋ぐ
粟田あや アイクリエイト代表取締役

インタビュー

12 経営のビジョン
クリエイティブを自ら仕切る
藤田晋 サイバーエージェント
代表取締役社長



62 バイオニアの突破力
一瞬のチャンスをつかむ
思考法とトレーニング
平原康多 プロ競輪選手



122 グローバル市場の見方
世界はフラット化が進む
ジョン・サイファート
オグルヴィ・アンド・メイザー ワールドワイド
CEO



レポート

132 プロジェクト研究報告
エコミュージアム
「館山まるごと博物館」
地域資源の再発見と街づくり

Topics

66 第1回日本版
CCRC二地域居住先進
自治体市長サミット

66 スポーツイベント開催を
契機とした地方創生セミナー

書評・他

118 MPDサロンスピーチ
農業の未来を変えるマルシェ
永島敏行 俳優、青空市場代表



138 MPD通信
第一線の実務家と近い距離で議論ができる場

140 MPDの本棚
40年後の社会デザイン
鈴木将之 EY総合研究所 シニアエコノミスト

中
さい
賞(1点
せし
475-767
ーフ食品
メダイ
0
nkaigi.com